

氏名	みず　こし　とも 水　越　知
学位(専攻分野)	博　士（文　学）
学位記番号	文　博　第　362　号
学位授与の日付	平　成　18　年　3　月　23　日
学位授与の要件	学　位　規　則　第　4　条　第　1　項　該　当
研究科・専攻	文　学　研　究　科　歴　史　文　化　学　専　攻
学位論文題目	宋元時代の祠廟信仰の変容と秩序形成

論文調査委員 (主査) 助教授 中 砂 明 徳 教授 夫 馬 進 教授 杉 山 正 明

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は中国の民間信仰の歴史上大きな転換期である宋代における祠廟信仰の問題を中心に提起し、合わせて元代を論じ、明清時代以降への展望を示したものである。序論、本論四章、結論で構成されている。

序論では、研究の交通整理を行う。民間信仰の問題は早くから欧米の学者の注目するところとなり、今日なお関心を集めている。近年、中国・台湾でも研究が盛んになっている。しかし、歴史学・文化人類学・社会学・文学などの各方面からのアプローチが錯綜していて、議論の前提が共有されていない。そうした中で、宋代の変化が重要なのは衆目の一致するところだが、その内実、後代への展開について、歴史的に充分解明されているわけではない。

著者は、近年アメリカの研究者によって提示された「宗教市場」をキー・コンセプトとして、民間信仰が国家の宗教政策とのかかわりの中で市場における優位を獲得していったプロセスに注意を喚起するとともに、地域で信仰を集めた神だけでなく、全国で「通祀」された神の信仰・政策を合わせ論じる必要性を訴え、以下の本論では地域神・全国神の双方を取り上げている。

第一章「宋代社会と祠廟信仰の展開—地域核としての祠廟の出現—」では、宋代の祠廟信仰の展開を、国家の政治的要請と地域社会の経済的要請の両面から論じている。まず、北宋後期に顕著になる祠廟への賜額・賜号や祠典の整備を党争や徽宗の宗教政策の中で考察する。さらに、南宋において、賜額・賜号がもはや中央の政治状況と連動することなく、地域社会側の強い働きかけに応じたものへと変わっていくことを確認し、その転換点として、従来看過されてきた南宋初年の高宗期の賜額・賜号政策の意義を強調する。

その一方で、地域社会側の賜額・賜号請求の背後にあるものを見極めようとする。賜額・賜号請求の前提となるのは、その祠廟のもつ靈験のあらたかさである。また、封号獲得はその祠廟の靈験を広くアピールし、参拝者の増大、それに伴う廟市の繁盛を結果した。こうした「宗教市場」の拡大を演出したのが巫祝と地方有力者であったとして、賜額・賜号を勝ち取った地域社会側の主体性を浮き彫りにする。

第二章「宋元時代の東嶽廟—地域社会の中核信仰として—」では、五嶽の筆頭である山東省の泰山信仰が宋元時代において全国に広まっていった様相を描く。まず、東嶽信仰の広まりの契機が北宋の真宗皇帝の封禪にあったとする説を退け、この時点での動きは地方的に限定されたものであったとし、むしろ北宋中・後期において徐々に東嶽の行祠が全国に広がっていったことを明らかにする。

さらに、城隍廟がまだ普及していなかった宋代における東嶽廟の「全国神」としての意義を確認するとともに、その発展過程が江南と華北とは異なっていたことを指摘する。すなわち、江南においては、州・県のみならず市・鎮でも盛んに東嶽の行祠が作られ、それが宗教的・経済的な結節点となっていたのに対し、華北では「社」中心の農村型信仰に止まり、江南に比べると信仰圏の広がりが限定されていたと言うのである。

第三章「元代の祠廟祭祀と江南地域社会—三皇廟・賜額賜号・社稷壇—」では、研究の多い宋代と洪武帝の祠廟政策の大

転換が際立つ明初の間であって、従来系統的に論じられてこなかった元代の祠廟信仰の問題を取り上げる。

元朝の祠廟政策で際立っているのが三皇廟の存在である。伏羲・神農・黄帝を上古の聖人として一括して祀るのは唐代に始まるが、「医学の神」という性格が前面に出てくるのは元代である。その前史を掘り起こすとともに、江南の士大夫が医学の神という狭義の限定に反発し、まずは聖人として信仰すべきだと主張していたことを紹介し、王朝による普及政策が地域社会に受容されなかったと述べる。

ついで、元代の賜額・賜号の状況について論じる。南宋に比べると請願がなかなか承認されなかったが、著者は請願の過程で神の靈驗よりむしろ地方官の功績が強調されるようになったことに注目し、それを「官の信仰」である城隍信仰の普及と同方向のものとしてとらえ、後代への筋道をつける。

また、三皇廟とともに各州県に一律に設けられた社稷壇は土地・農業の神を祀るものであり、都市の守護神である城隍神とは別様の存在であったが、南宋時代には城隍神にも農業神としての性格が付与され、社稷壇との境界が曖昧になり、両者はセットとして把握されるに至る。元代の社稷壇の再興もまた、その点で明代の城隍廟一里社壇のセットを準備するものであったとする。

第四章「伍子胥信仰と江南地域社会—信仰圏の構造分析—」では、呉に仕えて悲劇的な死を遂げた伍子胥の信仰について論じる。伍子胥が楚から呉に逃亡した経路をめぐる異伝に注目して、伝説の形成過程に地域性を見出し、それが呉方言の分布図とはほぼ重なることを指摘する。

さらに、蘇州と杭州の伍子胥信仰の「本山」争い、南京の蔣帝信仰による対抗のうちに、三都市の歴史的個性が信仰面でも表れていることを確認する。最後に、信仰圏の問題を一般化して、「宗教市場」における競争力を左右したのは、靈驗とともに伝説であったとする。

結論においては、宋・元代の祠廟信仰がいかに洪武帝の改革へと収斂していったかを改めて整理する。城隍神の全国普及と東嶽廟の衰退に見られるような「儒教化」の勝利の一方で、民間信仰は地域的な限界性を有しながらも社会的影響力を持ち続けた。これを農村文化の基層にあるものとして静態的にとらえるのではなく、宗教市場の中で激しく浮沈してきたものとして歴史的に分析してきた本論の成果を確認する。

## 論文審査の結果の要旨

中国の民間信仰は多くの研究者たちの関心を集めてきたテーマである。とりわけ、欧米の中国研究者の関心は高く、はやくから人類学者や社会学者の研究対象となってきたし、最近のアメリカの研究でも好んで popular religion の問題を取り上げている。また、日本でも、すでに戦前の『中国農村慣行調査』において信仰の問題が取り上げられていたが、近年のフィールド・ワークの盛行にともない、祭祀と演劇とのかかわりが精査され、市鎮の勃興と信仰圏の問題が相即的に論じられている。さらに、中国・台湾でも近年研究がとみに盛んである。しかし、今のところ、様々なディシプリンが並立し、議論を共有する場が形成されていない。種々の概念モデルが提出されているものの、それらが歴史的に実証されていないことが混乱を拍車をかけている。

そうしたなかで、歴史研究の立場から、宋から元にかけての祠廟信仰の変容を跡づけたのが本論文である。この問題については、かなりの数の先行研究が存在するが、北宋・南宋の展開をそれぞれ個別に論じる傾向が強く、金・元朝の研究は不十分であった。それに対し、著者は宋から元への展開を一貫した形で追究しようとする。

本論文の特長は、以下の三点にまとめることができる。

〔I〕 民間信仰の展開が広い枠組みの中で検証されていること。

民間信仰がある都市・村落で孤立して存在するのではなく、外部との交通の中で形成されるものであることは、これまでの研究においても意識されてきた。たとえば、近年のアメリカの代表的な研究では、信仰圏の拡大に果たした商人の役割が強調されている。しかし、実際にその伝播の過程が具体的に跡づけられているわけではない。著者はこうした議論には留保をつけつつ、史料的に検証可能な範囲において、信仰圏の拡大のメカニズムを明らかにしようとした。その結果、東嶽廟の普及についての通説的理解を修正し、江南における伍子胥信仰の地域的な分布状況を具体的に示すことに成功している。

〔II〕 信仰の伝播・普及だけでなく、それを阻害する要因にも注目していること。

上述のように、近年の研究とくにアメリカのそれは、信仰圏がいかに普及・拡大していったかに関心を注いでいる。「宗教市場」という概念の提示や、巡礼研究の流行もそれを示している。

しかし、著者は同時に信仰の拡大を阻む障壁にも注目し、モデルケースとして伍子胥信仰を取り上げて、異伝の形成が交通路の条件に規定される、つまり交通路が普及と同時に伝播の障壁にもなりうることを示した。さらに、異伝に基づく信仰圏の区分が方言分布図と重なり合うことを指摘する。呉方言の下位区分の形成過程がほとんど説明されていないので、この符合が必然的なものなのかどうかは検討の余地を残すが、興味深い仮説ではある。

〔Ⅲ〕 民間信仰だけでなく、「官の信仰 official religion」の展開に見通しを立て、明代初年の急激な制度改革の先蹤を前代に掘り当てたこと。

明の洪武帝が全国的に整備を図った城隍廟は、以後文廟とともに、都市における官の信仰を代表する存在となった。しかし、その前史については、城隍そのものに言及した史料が決して多くはないこともあって、明らかではない。著者は、こうした史料的制約を突破しようとして、北宋中・後期に全国に普及した東嶽廟や、元朝政府の肝いりで文廟とともに各州県に祭祀が義務づけられた三皇廟や社稷壇を取り上げた。これらの信仰の消長を補助線とすることによって、城隍廟の位置を見定めようとしたのである。その結果、すでに元朝下において、「官の信仰」の強化への方向性が生まれていたことが示された。

第一章で論じるように、北宋末期の徽宗時代には道教を中心とした集権的な宗教政策の一環として祠廟に対する賜額・賜号のコントロールが図られたのに対し、南宋においては市鎮に叢生する地域神への賜額・賜号請願が容易に承認され、官側の統制力は弱まった。しかし、元朝においては、賜額・賜号はしぼり込まれ、請願する側も神の靈験より、神に雨乞いをする地方官の功績を強調するようになった。こうした事実、著者は官側の信仰統制の強化を見る。また、城隍廟と社稷壇の関係をとらえなおそうとした南宋時代の士大夫の思想潮流に触れ、それが元朝における社稷壇の再興、さらには明代の城隍廟一里社壇の系列化へとつながったとする。洪武帝の改革が決して突発的なものでなく、その下地がすでにできあがっていたとする主張の方向性は首肯しうるものである。ただし、議論の展開にやや強引さがあることも否めない。

以上の成果の一方で、問題点も残されている。まず、史料解釈の面で、より慎重さを求めたい。このテーマに関する史料は系統的に残っているわけではなく、零細なものが散在するというのが実情である。関連の材料を、碑刻は別として文献に関しては、ほぼ網羅したところに著者の苦心がある。しかし、誤読がやや目につき、論旨に関わるほどではないが、議論の説得力を些か損なっている。第二に、先行の種々雑多な概念規定を咀嚼してはいるが、まだ消化しきれていない。食べ合わせがよくないために、先行研究の批判・摂取から自説の展開へと論がうまく運んでいないところがある。

これらの課題が解消されれば、中・西・日の、しかも多種多様な研究者が参入している当該分野において、相当の発言力を持つ研究となるだろう。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。

2006年3月2日、審査委員3名が、論文内容とそれに関係した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。